分一覧表は，本書の利用者に多大の便益を提供している．

なお，追録として，最近使用されている薬用植物やハーブの写真集が加えられた．新訂版においては，旧版に比べ，以上のような種々の改良がみられているが，本書の価値を一層高めるためには，生薬早見検索表のメークアップを改善し，写真の色彩をより自然色に近いものにするとか，縮尺を入れて実際の大きさを対比し易くするなど，学術書としては，なお一工夫が望まれる．（柴田承二）

□ロイ・ヴィカリー（著），奥本裕昭（訳）：**イギリス植物民俗事典**．2001．¥7,800（税別）．八坂書房．

本書は，Oxford University Press から1995年に出版された，Roy Vickery: A Dictionary of Plant-Lore の翻訳である．著者のヴィカリーはロンドン自然史博物館顕花植物部門に勤務し，標本の出入れや貸出し等の業務を担っている．同部門を訪れた人は痩型長身で忙しく働くヴィカリーのことを思い出すに違いない．

ヴィカリーはこうした仕事の一方で，植物の民俗学についての研究を精力的に行ってきた．その成果としてこれまでに，単行本として Holy Thorn of Glastonbury（1979年），Unlucky Plants（1985年）を著し，民俗学の専門誌である Folklore 誌上にも *Lemna minor* and Jenny Greenteet 等の論文を発表している．

著者は多数の個人や機関に植物についての民間伝承等に関する情報提供を呼びかけてきた．本書はその成果であり，その目的をイギリス諸島の植物に関する民間伝承と，その伝統的な利用法－植物民俗学－についての信頼のおける情報源を提供することにあるとしている．収載された情報は一般的な民間信仰，伝統的な習慣の中での利用法，民間療法の中での利用法，その他の利用法，特定の個体に関する事例であり，各項目での記述は概ねこの順に従っている．

各項目（植物の場合は種であることもあれば複数の種であったり，属の場合等もある．植物以外では例えば漂着植物とか「のどの渇き」など）では，著者による注釈的な記述を伴うこともあるが，主体は出典が明記される収集された情報の記述である．従来のこの種の資料集にありがちであった信頼性の欠如に出典を明記することで解消を図ったといってよい．これは日本でのこの分野の出版でも学ぶべき重要な点であろう．

本書の序論として纏められた，「イギリス諸島における植物民間伝承の研究小史」は，民間伝承の研究史として手ごたえを覚える一方で，イギリス諸島における植物の研究あるいは地方植物研究の特色をも垣い間みることができ，植物学徒にも興味深いものである．民俗学と植物学の両方に深い造詣をもつヴィカリーなればこそのものである．

私は本書の原著は見ていないが，翻訳に当たっては，植物自体については無論，古英語，方言，俗語，ゲール語，ラテン語などの諸語へ理解，イギリス諸島の歴史・文化全般への深い造詣が欠かせない．これは実にたいへんなことであったことだろう．項目索引が植物の学名と和名，一般項目と3つあり，事典として機能を高めている．訳者の労ならびに出版不況が云われる中，このような貴重書を出版された八坂書房の見識に謝意を表したい．

（大場秀章）

□植物地理・分類研究会：**各都道府県別の植物自然史研究の現状**．植物地理・分類研究 **50** (2): 143–262. 2002.

北陸の植物が発行されて50周年の記念号が出版された．当初からこの雑誌の出版の中心となった里見信生氏が2002年6月2日に亡くなられたため，前半は里見氏の追悼号に当てられている．後半は50年記念の企画として，都道府県ごとの植物自然史研究の現状を展望するものとなっている．植物誌，研究機関，標本庫，レッドデータブック，植物群落の見出しの下に，すべての都道府県から執筆者の寄稿を求めたものである．こうして一覧できるようになると，各地の現状がよくわかる．一度も植物誌が出版されていないところ（東京都）があったり，標本庫が確保されていなかったり機能していていない県（これは結構多い）があったり，自然ブームの中で基盤整備が国として立ち遅れている現状が記録されている．反面，レッドデータブックは刊行済みかここ数年内の予定がすべて立てられていて，順序が逆だったらよかったのにと思わせ

る． （金井弘夫）

□能登谷正浩：**海苔という生き物** 178 pp. 2002. ￥1,600（税別）. 成山堂書店.

朝の食卓を賑わす浅草海苔は寿司やおにぎりにも欠かせない食材であり広く人々に親しまれているが，その実体をよく知る人は意外に多くない．今やアサクサノリは見つけることが困難で絶滅危惧植物に指定されている，浅草海苔の商品名で売られているもののほとんどはスサビノリという種類である，アサクサノリやスサビノリの仲間（アマノリ属）の海藻は貝殻にトンネルのような細い孔を掘り菌糸のような形で夏を過ごしている，などなどである．

著者の能登谷教授（東京水産大学）が先に編纂した「海苔の生物学」（172 pp. 2000，成文堂書店）は，海苔養殖に携わる人や海苔研究者，あるいは海苔や海藻に関心をもつ人々を対象とした専門書であったが，本書はぐっと砕けた内容で，図やグラフも多く，ノリの名前と生える場所，名前の付け方，ノリの形と種類，ノリの一生と繁殖，海苔の栽培技術とバイオテクノロジー，沿岸環境とノリの生育などの章や項の題名からもうかがえるように，広く一般に親しみやすい読み物となっている．著者は昨今の海苔研究者の減少を憂え，海苔に興味を持つ人々が増えて，海苔の研究とともに海苔産業がさらに発展することを願って本書を執筆したという．充実した内容がわかりやすく丁寧に書かれている本書は，高校生や大学生，さらには一般の方々にも広く読んでもらいたいという出版の意図をよく適えているといってよい． （千原光雄）

□大房　剛（編著）：**図説　海苔産業の現状と将来** 223 pp. 2002. ￥6,400（税別）. 成山堂書店.

日本の浅草海苔養殖業はただ一篇の植物学の論文が引き金となって短かい年月の間に劇的に発展した希有な産業のひとつである．論文は胞子体が糸状となって貝殻を穿孔して越夏するというもので，発表はイギリスのK. M. Drew博士で1949年のNature誌上であった．爾来，人為制御によるタネ（胞子体）の保存とタネ蒔き（胞子付け）など，数々の植物学的な研究とその応用面の研究が成果を挙げ，1950年に年間5.6億枚であった生産高は右肩上がりに上昇を辿り1956年には4倍の21.7億枚になり，1960年には60億枚を突破し，1973年には遂に96億枚に達し，以来今日まで，多少の変動はあるものの，ほぼ100億枚を維持している．1枚の単価が10円前後であるので，海苔の年間生産額は約1,000億円に達し，今や日本の海面養殖産業のトップを占めるにいたっている．

11章から成る本書は，海苔養殖業の推移，県別の養殖業の推移，消費形態の推移，流通業界の推移，海苔の輸出と輸入の状況の推移，および外国でののり養殖の現状など，海苔の経済的側面を主に表や図を使って8章に亘り紹介しているが，さらに海苔生産の増加に役立った品種の選別，人工採苗技術の開発，浮き流し法など新しい養殖法の開発，のり網の冷蔵保存法の開発，雑藻の駆除方法など，のり生物学の知見を基礎に発展した養殖関連技術の紹介に3章，およそ50頁を割いている．

各章末に挿入されたトッピクス，美味しい海苔の見分け方・使い方，乾し海苔再乾燥の方法，海苔の厚さ，海苔の美味しさ，海苔の裏表，焼くことの意味，海苔の保存法，バター臭い佃煮，味付け海苔，など13の囲みの記事は有益で楽しく，さすが永年海苔の研究と海苔業界に携わった元・山本海苔研究所長ならではを思わせる． （千原光雄）

□能登谷正浩（編）：**アオサの利用と環境修復**（改訂版）171 pp, 2003. ￥2,600（税別）. 成山堂書店.

赤潮と訳されるRed Tide（レッド・タイド）はある種のプランクトンが異常に大量発生して海水を紅色に変色させる現象で，日本では高度成長期に内湾や湾奥部でしばしば発生して，ハマチなどの養殖魚類に大きな被害を与えたことで良く知られる．Red Tideに対比させてできた用語Green Tide（グリーン・タイド）は，大型緑藻のアオサ類が海岸を埋め尽くすように大発生して一帯が緑色に変色する現象に与えられたもので，日本では，レッド・タイドと同様に，1970～80年代の高度成長期頃から顕著に出現し，特に栄養塩の豊富な内湾や河口付近に多く発生する．海岸に積